

末黒野

すぐろの

8月号 (通巻804号)



片手鍋

小川玉泉

トンネルを抜け新緑の椰子並木
老鶯や小雨に煙る谷向かう
古城めく白亜の塔や山若葉
アカシヤの若葉並木を鼓笛隊

酔の効きし鱈の押ずし走り梅雨
牛小屋の奥の暗さや柿若葉
梅雨三日秋明菊の狂ひ咲き
地境の夾竹桃や夜を白く
梅雨の音聞きつつ磨く片手鍋
内袋剥き甘夏の瑞みづし
実梅選る姥の姉さん被りかな
手ばしこく実梅選り分け媪たち

按針塚

松本三千夫

青葉潮富士借景の島ひとつ
灯台へ径じぐざぐに若葉風
老鶯を眼下按針夫妻塚
崖道の走り根太し忍冬
稜線の夜目にも著し時鳥
懐の深き山里栗の花
花とべら海は展けて波立たず
浜昼顔手をつけば砂すぐ崩れ
森出でて色失へり夏の蝶
空梅雨や髭題目の彫深く
抜け道や影あえかなる小判草
未草生き物のゐて池揺らす

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

桶の箍

黒滝志麻子

潮風の小さき一村花祭
犬の耳ぴくぴく動く花の冷え
遅桜湖のほとりに舟干され
柳絮飛ぶ犬の寝そべる古着市
海べりの丸き月あげリラの花
松蟬の声のかなたや湖ひかる
徒勞てふ言葉知らずやあめんぼう
山雀や干されてゆるぶ桶の箍
旅信出す赤きポストや蝸牛
正翠師のぼうたん開く艶やかに

短夜

田中臥石

膝折りて都忘れの花起す
家裏の捨て田一枚蛙鳴く
望郷の胸をはみ出す菖蒲の湯
検針婦つと見上げたる柚子の花
補植苗手に連休の果てにけり
短夜や体にひびく海の音
ふるさとの桜桃届く誕生日
短夜の夢や故郷の鹿踊し
筍を掘るや傾むく山の空
植田道一書小脇に帰りけり



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



夏兆す 西川みほ

枝垂れ桜散りつつ纏れ解きにけり
夜行バスの終着駅や初燕
山藤へ花眼を誘ふ鳥語かな
天領の杉の高さに藤の花
若葉雨森に深さの生まれけり
田水良く流るる村や夏兆す
祀る神知らねど高く桐の花

蚕 豆 鈴木一三

惜 春 森清堯

味見する小指の先や木の芽和
仏壇の供花の水替ふ夏立てり
叱られて泣き囁る子や棕櫚の花
蚕豆の茹でたて提げて妻見舞ふ
青鷺の片足立ちの孤高かな
軽やかに更衣せるナースかな
新茶淹れ退院妻を迎へけり

桜糝ふりつぎ寺の石畳
行く春の波の巻き込む藻屑かな
惜春や湖を眼下の天守閣
別れ霜湖尻の堰の水の嵩
街道の葺屋根しのぎ桐の花
安穩の日柄や垣の鉄線花
産地の名刻む飛び石錦鯉

桐の花

森清信子

役者 絵

石黒興平

池に立つ支柱の数や紅枝垂
山門の蒼き夕暮山桜
池の橋幅一尺や蝌蚪の足
春時雨山よりも川暮れなづみ
青年のひきしぼる弓若葉風
釈迦堂へ鈴蘭の香の届きをり
鶏鳴に明くる里山桐の花

破風三つ並ぶ歌舞伎座風光る
役者絵の眉間の険し春の宵
強東風や鳳風紋の鬼瓦
盛りのよき漁師の店の白子井
浅蜷取る鋤簾の波に続く波
惜春や踏石高き躍り口
蹲踞に写る楓の芽吹きかな

若葉冷

吉田きみえ

吹流し

岡田史女

閑かさや大寺つつむ花吹雪
乗り継ぎて四月行く日の能舞台
風光り浜の夫婦の網手入れ
帰宅して遅き夕餉の新茶かな
母の忌の行く春惜しむ一日かな
帆かけ舟競ひて逗子の若葉冷
一輪の濃紫陽花挿し無縁仏

宝鐸草日ざし乏しき山城に
薫風や峡の裾田の均されて
兄の忌を修す李の咲く里に
老鶯や日の斑のあそぶ杉林
一村といふも四五軒吹流し
住む人の絶えし生家や花菖蒲
海峡へ夕日落ちゆく桐の花

青炎集

横浜

新堀満寿美

春宵の一語に途切れ訃の電話
軋みつつ長閑に動き花時計
オカリナの幽かな音色風光る
鶯の行く手ゆく手や峡の坂
初蝶のふんはり風に乗り行けり
藤の花かほり幽かに雨催ひ

横浜

橋場美篤

近づいて退さりて愛づる滝桜
踏台の畑に据ゑられ花りんご
花堤水満々と堰落つる
うららかや三尺ほどを眺める鯉
前山のいよよふくらみどりの日
法要の庭に咲き満つ大牡丹

小川玉泉選

横浜

太田良一

出漁や船尾に小さきこひのぼり
杉の香の地酒をつけて鮎の宿
薫風や鳥語もれくる芭蕉庵
朝掘のたけのこづくし京の宿
風薫る街のちんちん都電かな
青竹の水の蒼さや冷素麴

横浜

饗庭恵子

大ぶりの草餅とどく隣より
鰯口の一打の余韻夕牡丹
堰落つる水の勢ひや夏つばめ
黒揚羽日の斑の森へ消えにけり
咲きみちて金雀枝家を明るうす
黄菖蒲や池面にあそぶ鯉の口



横浜 今泉あさ子

母の忌の齋膳に摘む木の芽かな
阿国忌の新歌舞伎座や花衣
見るのみの銀座ブティック春衣
連休の締めか春雷一つ鳴る
おやすみを交はす絆や春の夜
さらさらと新茶老舗の量り売り

横浜 原 和 三

眉根よせ射る少女風光る
春蟬や一枚を脱ぐ峠道
行く春の大道芸のピエロかな
まな板の音かろやかに立夏かな
洪鐘の古りし撞木や若楓
昼灯す堂丸窓の新樹光

横浜 高木邦雄

筑波嶺の眼下の畑や麦熟るる
洞深き幹の老松若緑
切り岸に懸る山藤滝なせり
花薊日の斑の径に彩刷けり
甲高き神鶏一羽初夏の宮

若葉映ゆ鯉みな太き五十鈴川

横浜 河合とき

雨もよふ夜風をまとひ雪柳
クローバやリードゆるめし犬と駆く
摘み草やつかず離れず姉妹
花かんざし日はうらうらと遊歩道
すかんぼや子は野良猫に名をつけて
海遠く住み一鉢の錨草

横浜 辻井ミナミ

峡の田の畝間に白き落花かな
花の昼光る寺門の大甍
雨一夜未黒の芒萌え初めぬ
春の海風といへども波頭
城址や桜の若木茂りをり
大輪にあらねど庭の緋の牡丹

横浜 青木由芙

築山の斜陽をまとひ花えびね
揺り椅子に寄りては離れ蝶の昼
櫻の芽の触れんばかりや山の駅
夕日浴ぶ山家の庭のすみれぐさ
夏立つや炭焼小屋の注連古び

青竹の垣根に似合ひ鉄線花

耕 土 集

松本三千夫選



禅寺の竹の皮散る抹茶席

荒縄で括るたかな道の駅

たけのこや十二単衣に包まざる

割箸の先の角張り初鯉

青葉風車夫のはらかけ紺木綿

藤沢 宮澤 靖子

横浜 加瀬 伸子

先づ神酒を越の春田へ注ぎけり
吹流しスカイツリーを撫でてをり
丸文字のカードを添へてカーネーション
歩をゆるめ車夫は蜜柑の花の下
香り立つ瀬戸の小島や花蜜柑

新潟 太田チエ子

山口 郁子

街道に残る松の木鳥雲に
焼印のある玉子焼花の宴
命綱付けてぜんまい採りにけり
県境りんごの花の白々と
ひとところ路地の明るし梨の花

蟻塚や大地に怯むことのなき
薫風に葉裏葉表輝へり
足痛め杖つく母の日となりぬ
客去りて仏と二人夏座敷
マロニエの花咲く街の異国めき

狭山 沼崎 千枝

大霜 朔朗

鼻抜くる香も摘みぬ花山椒
初節句青空覆ふ武田菱
唐松の若葉の波の麓かな
アルプスを映す田の面や夏に入る
父の忌の甘み僅かな新茶かな

夏近し遠出促す万歩計
川を舞ふ生徒の数の鯉のぼり
石多き一夜城址や著我の花
幹に耳当てて樹の声水木咲く
初浴衣小さくなりたる力瘤